

特集

状況をシビアに判断し、苦渋の選択をした福島の農業経営者たちの声を聞こう

平成23年12月15日発行 毎月1回1日発行 No.189 平成11年3月8日 第3種郵便物認可 ISSN 1881-4727

農業経営者

耕しつづける人へ

FARMERS' BUSINESS

2011 December

12

No.189

特集

リスク回避と経営発展のための新天地を探す

続

農場“分散・移転”

の ススメ

新・農業経営者ルポ

大分の大地に足をつけ
日本を変革する国土。

(株)西日本農業社 (株)コディコロ 代表取締役社長 後藤慎太郎

Twitter: @FarmbizEditor

<http://www.farm-biz.co.jp>

新・農業経営者ルポ／第89回

大分の大地に足をつけ 日本を変革する国士。



大分の大地に足をつけ 日本を変革する国土。

少年時代から「変人」と呼ばれた男は、青年になっても変わりなかった。日本の未来を憂い、大学卒業後に地元の農協へ就職したものの、平凡な日常を過ごす他の職員と自分との間に意識の差を感じた。「いよいよ自分の出番」と、農家の出身でもないのに就農し、「我こそ農地の番人」とばかりに手当たり次第に受託農地を引き受けてきた大分の風雲児である。彼が思い描く未来とは？

取材・文／李春成 撮影／紺野浩一（編集部）、若宮祐

ひとりの日本人として 中山間地の農地を守り抜く

かつて稲葉家のもとで繁栄した城下町は、昼にもかかわらず疲労感が漂っていた。毎年紅葉の季節を迎えると、臼杵市では「竹宵祭り」が開催される。無数の竹製キャンドルに火が灯され、小さな古都をくまなくライトアップするのだ。幻想的な夜に人びとは酔い、語り明かす。筆者が若き、革命家と出逢ったのは、祭り翌日の週明けだった。

臼杵湾へ揚げられた魚に舌鼓を打ちながら、後藤慎太郎の携帯電話はひっきりなしに所有者の声を求めた。そんな忙しい合間にも、彼のトーンは落ちる気配を見せない。

「高校生から大学生にかけての頃、朝鮮半島情勢の緊張や飼料価格の高騰などをきっかけに、国のあり方、そして国の大本たる農業がどうあるべきか、いろいろ考えていました。世間では「右翼」と呼ばれるような思想家たちの本を読みあさった時期

もあります」

大学卒業後の就職先として、大分市農業協同組合を選んだ。農協で働くことが日本農業を変える近道になるのではないかと思っただけだった。しかし、実際には大学時代に宅建取引資格を取得したこともあり、主に不動産部門を担当し、農地転用手続きや資金融資業務に携わる日々を送る。肚の底で沸々と募る違和感

は拭えないままだった。「同僚の多くは有力な組合員の2代目です。給料がもらえるところとして農協を選んだだけで、農業に対する問題意識もなかった。ボクの居場所なんてありませんでした」

そのような環境に身を置けばこそ農業への思いが高まっていった後藤は、農産物マーケティングを学ぼうと大分大学大学院経済学科に社会人入学を果たした。昼は農協、夜は大学院とハードな2年間を過ごし、2003年春に修士課程を修了する。また修了と同時に農協を退組し、イタリアへ短期留学した。ちょうど

スローフードがもてはやされた時代だった。帰国後、直売所「木の花ガルドン」経営で知られる大分市大山町農協に勤めることになったが、わずか3カ月で退めている。

機が熟したことを悟ったのだ。「いよいよ自分が、現場でやるしかなかったんです」

当時、後藤の父親の益喜は金融業、母親の澄子は人材派遣業を営む個人事業者だった。好きな仕事をしている両親の後ろ姿を見て育ったからか、何らのためらいもなく、自らの志を実現するために起業した。

「実際に地に足をつけて農地を守る、あるいは耕作放棄地を再生することで、日本人としての役割を全うできるんじゃないかと思うようになったんです。地元から離れて都会で悠々と暮らす若者もいます。そんな彼らにも「後藤さんが頑張ってくれているから田舎は大丈夫だ」と、そう思ってもらえるだけで嬉しいです」

36歳の新風が力強く続ける。

「世間が、グローバルだとか。PPPだとかいって海外に目を向けている中で、ボクは、今自分がいるこの中山間地、そこにある水田を中心とした農村の風景に、日本人としての心の拠りどころがあるという思いを強くしています」

就農者の高齢化や離農が進む中山

株式会社西日本農業社 株式会社コディゴロ 代表取締役社長

後藤慎太郎 大分県臼杵市

ごとう・しんたろう ●1975年大分県大分市生まれ。大学卒業後、大分市農業協同組合入組。同組合在籍中に大分大学大学院経済学科修士課程に社会人入学。2003年3月、同大学院修士課程修了とともに大分市農協退組。同年5月イタリアへ短期留学。同年11月大分市大山町農業協同組合に入組するも2004年1月退組。同年8月農業生産法人西日本農業社を設立。09年1月株コディゴロを設立。水田25haのうち10haをコメ（ヒノヒカリ）、残りを生産調整分として稲わらサイレージ、小麦と雑穀を生産。水田作業受託75ha。畑10ha（ニンニク、ペビーリーフ）。ハウス85aでもペビーリーフを生産。グループ年商は約6,000万円。「尊農王道」が社是。

<http://sonnodo.com/> <http://www.codigoro-japan.com/>



間地について、農水省は直接支払や集落営農組織化などで策を講じてきた。だが、経営者育成策はおろそかにしたために、ほとんど効果を上げていない現状がある。いわばこの困難を乗り越えるため、誰かが「革命」の狼煙を上げなければならぬ時代が到来していた。

志と現実との試行錯誤を続ける日々

他界した祖父名義の水田5反、畑8反から後藤の挑戦は始まった。

「平成の大合併」で臼杵市に編入されたが、本拠とするのは、同市南部の野津町だ。京都の一休、熊本彦一とならぶ頼知者・吉四六の出身地として知られる。殿様の頭に鳥の糞が落ちたのを見た家来が、「お代わり」と言っって首を差し出したという有名な頓知話がある。

後藤が南西日本農業社を設立したのは、大分大山町農協を退めてからおよそ半年後のことだった。日本地図を俯瞰した時に、滋賀県を境にして、南へ下ると中山間地の面積が増え、耕作放棄地も増えていく。後藤には「西日本」と呼ばれる地域の農地を守っていく役割を、この野津町を出発点に果たしていきたいという思いがあった。そこで社名に「西日本」を冠したのだった。

後藤は、計算よりも気持ちが悪く走ってしまいうタイプなのだ。社名のスケールの大きさのわりには、創業の時点で用意できた農地は、ごくごく小規模だった。創業以降は離農者から農地を譲り受け、地域の高齢農家や兼業農家から作業を受託されるなどして、その規模は年を経るごとに倍々ゲームのように増えていった。その一方で「農協で自分たちのコメがよそのものと混ざるのはイヤだ」という農家の声を聞き、「自前のライスセンターを建設する。また獣害対策のため、水田を囲う金網や鉄柵を購入した。公庫融資を受けられたとはいえ、自己資金もかなり額を投入したのだった。

「儲からない仕事をたくさんしているので、経営者としては失格かもしれません。ただ、「自分は社会起業家だ」という意識が強くて、国が守れない農地を代わりに守っている、という自負があります。中山間地を抱える農地の問題を解決していくのが西日本農業社の使命です。強い思いがなければやってられません」

モンゴルの草原にひとり佇み、詩を書きたかった。天台宗を興した空海に憧れ、阿闍梨のような高僧になりたかった。そんな現実離れした夢を心に描いた少年は、常に「変人」扱いされてきた。



1 地元の理解もあり約10haの水田はひとつの地域に集約できた。この中には母方の祖父から受け継いだ水田も含まれている。
2 大分県の場合、産地ではないためライスセンターは補助事業とはならない。だが、個別乾燥したいという農家の要望に応えるため、新設した。3 この地域の獣害がいかに深刻かを物語るシカの角。角が生え変わる時期に道端で拾ったものである。4 「Agrizm」取材でのヒトコマ。自らを耕作放棄地バスター、とも。5 子ザルであればこの網をすり抜けてしまうという。



大分の大地に足をつけ 日本を変革する国土。



6 7 ベビーリーフは露地とハウスで無
 肥・無農薬栽培。障害者の雇用もして
 おり、刈り取り業務を担当させているス
 タッフのひとりの作業スピードはすさま
 じい。いまや欠かせない人材とか。8 事
 務所に併設されているベビーリーフの調
 整施設では、女性社員が袋詰め作業に勤
 しんでいた。9 ベビーリーフは現在ミス
 ナ、ルッコラ、ロコロッサ、ビート、
 レッドアジアンマスタード、タアサイ、
 オーク、ロメインの8種類。来年以降は
 12種類に増やす予定とのこと。

生産技術については、先人たちが
 ら多くを学んだ。高齢化の一途をた
 どる彼らからの教えは、今しか体験
 できない。肌と感覚でしか覚えられ
 ないことは数多い。素直に教えを請
 う彼の姿を、年配の農業者は孫のよ
 うに可愛く思ったに違いない。

中山間地の農地を維持する農業経
 営によって特定農業法人の認定を受
 けたことは、多少経営面での追い風
 となった。現在では、中山間地で県
 内最大規模の経営面積を誇る。耕作
 放棄地の拡大という背景はあるが、
 地域の農家から信頼を得られた後藤
 の経営者資質によるところも大きい
 といえるだろう。

だが、中山間地における農地の保
 全は難しい。山林の整備不全や温暖
 化の影響で、獣の個体数が増えてい
 るからだ。罪のない動物たちが食料
 を求めて山から里へと下り、手塩に
 かけて育てた作物を食い荒らす。大
 分県の獣害被害の総額は、90年代に
 4億円ほどで推移していたものが、
 21世紀に入ってからは5億4000
 万円を超えたそうだ。後藤は自身の
 ホームページのコラムに複雑な心中
 を打ち明けている。

〈鹿の被害が多いのですが、一度、
 100匹以上の猿の大群を見かけま
 した。高崎山以上の迫力です。彼ら
 は生きるために食べ物を探さなけれ

ばなりません。だから、真剣です。
 だけど、年配の人はみんな言います。
 「昔はこんなに獣たちが家の近くま
 で来ることはなかった」って。

**米麦とベビーリーフを
 経営の両輪に据える**

「来年死ぬかもしれないから、とに
 かく頼むよ」。どんなに荒れた農地
 でも引き受けるのが西日本農業社の
 原則だ。「受託作業の方が利益は出
 るんですけど……」と後藤は苦笑す
 るが、耕作放棄地をなくしたいとい
 う思いが起業の原点にある以上、損
 を承知で引き受け、開墾し、作物を
 植え、農地の保全再生に努力してき
 た。だが、今年はやむなく断った農
 地もあった。昨秋、後藤が農作業事
 故のために左足親指を切断したこと
 も少なからず影響しているが、それ
 以上に経営効率を悪くさせる耕作放
 棄地を経営者としてシビアに判断し
 た結果だった。

「所有者に戻せば確実に荒れると思
 っていた農地が、やっぱり荒れまし
 た。後悔がある一方、ボクだけが考
 えるべきなのか、国は本当に有効な
 中山間地対策を考えているのだろう
 か」という疑問があります。現状では、
 農家の意欲やこの先の展望の有無を
 問わず、どの農家も一律に支援をし
 ようとしていますよね。そうではな

く、ウチのように意欲ある農業法人を育ててくれる政策に変えてもらいたいですね。

余談ですが、今の「子ども手当」政策も無駄じゃないですか。お金ではなく、国が余ってるコメを全部買上げて、各家庭に現物支給したらいいというのがボクの特論なんです。コメは消費されるわ、農地は守られるわで、すごくいい循環ができると思うんですけどね」

この地域を守るならば 大企業への身売りも厭わぬ

順調に成長している西日本農業社の経営だが、後藤がどんなに崇高な大志を抱こうとも、すでに個人の能力では限界にきていることに気づく。かといって今のやり方のままでは、国や農協は頼りにならない。そこで後藤が打って出た手段が、企業との連携だった。

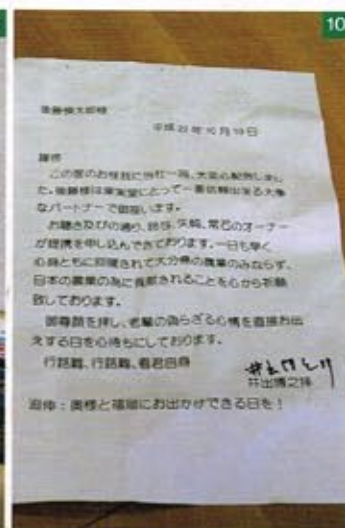
創業当初から西日本農業社の経営は米麦が中心だ。だが、これだけでは作業期間に限られる。社員の雇用を維持するために、周年収穫できる農作物を探していた後藤は、(株)果実堂(本社・熊本県西原村)が大分県内でベビリーフの生産拠点を作りたいらしいという情報を得た。同社は有機栽培ベビリーフの生産・販売大手で、経営戦略として有力生産

者との提携を模索していた。しかし、有機栽培という特性上、小規模経営の農家が多く、大規模栽培による価格抑制が至上命題としてあった。一方で、臼杵市は次世代の地域農業を有機栽培の拠点にするべく様々な施策を行っていた。

そんな彼らのプランと臼杵市の思惑をも理解した後藤は、井出博之・果実堂会長とコンタクトをとり、生産協力を申し出た。じつは後藤は、彼が大学院在学中に井出会長と出逢っており、ふたりには浅からぬ縁があったのだった。

2009年、果実堂の出資で、後藤はベビリーフの生産・販売会社である(株)コデイゴロ(欧文表記ではCOULORO)を設立した。「○○ファーム」などのありきたりな名前では陳腐すぎると、イタリア留学時に世話になった街の名前を拝借した。取引先は県内のほか、20%が福岡県のホテルやレストランで占められ、バックごとそのままサラダで使えるので好評だ。売り先の開拓に困っている近所の有機農家からパブリカなどの野菜を集荷し、レストランへベビリーフと一緒に納品するケースも増えている。

さらに昨年からは、新たに大企業との接点が生まれた。自動車部品を筆頭に、空調機器、太陽熱利用機器メ



10 後藤が農作業事故に遭ったと聞いた果実堂・井出会長から届いたお見舞いのファクス。魂と魂の触れ合いがあったと感じさせる文章である。11取材時に来社した大分部品・善岡和男副社長。外食・中食・流通以外の企業と農業のコラボには新しい時代の到来を感じさせる。12壁一面に農業関連の新聞記事の切り抜きが貼ってある。「まだ就農8年目ですし」と情報収集に余念がない。13ある企業人に誘われ、後藤は北朝鮮に国境を接する中国吉林省の農場に視察に訪れたこともある。「西日本農業社としては地域を守る使命があるが、男・後藤慎太郎としては世界の大地を耕したいという野望もある」と話す。



大分の大地に足をつけ 日本を変革する国土。



16 企業組合「グループ恵」とタッグを組み、臼杵市内に加工場併設型の直売所「めぐみ工房」を3年前にオープン。周辺農家から持ち込まれた農産物を西日本農業社が集荷し、この店に運んでくる。地元の食文化を守り続けたいという思いもあり、昔ながらの漬物を加工場で作るという。16 後藤家の面々。左から妻・小春、長女・梨花、父であり西日本農業社会長も務める益喜、母・澄子。



「カー大手として知られる、矢崎総業(株)グループとの出逢いである。」

同社グループは、日本国内に多くの支社、関連会社、工場を有している。地域社会に密着した経営を信条としてきたが、生産拠点が海外へシフトされてゆく流れの中で、母体が磐石なうちに新事業を立ち上げ、行き場を失いつつある従業員たちの雇用先を確保しようと動き始めている。そのひとつとして農業分野の進出に乗り出そうとしており、ビジネスパートナーとしての農業経営者を採す過程の中で、後藤と巡り逢った。

同社グループ、善岡和男・大分部品株副社長が言う。

「西日本農業社は平均年齢35歳前後の若い集団で、耕作放棄地を積極的に借りて取り組んでいる。その姿勢に打たれて一緒に生産に関わり、収穫したものを工場に持ち込んで、我われのチャンネルを通じて販売のお手伝いができるのではないかと思いました。こうした形であれば地域にも貢献できるし、若者だけでなく高齢者にも雇用を広げられる。こういう取り組みを始めたのは、グループ会社の中でも当社が初めてであり、本社からも期待されています」

現在、大分部品は西日本農業社が準備したベビリーフのハウスを2棟借り受け、社員を派遣している。

後藤はあくまで栽培指導しているにすぎない。そのため、現段階で資本関係があるわけではないが、将来的には、共同出資で別会社を設立する可能性も秘めている。

「企業側に呑み込まれる——」。これこそが、企業と対峙した時に振りが、後藤の描く理想は、そんなヘリクツを笑い飛ばしてしまう。

「矢崎総業さんの傘下に入ってもいいというぐらいの気持ちでやってます。この国をなんとかするという原点に立ち返れば、小さなことにこだわっている猶予はありませんよ。九州には大分県だけじゃないんですが、いずれは農協出資の農業法人になってもいいと思います。パブリックな存在になって、オールニッポンで農地を守ろうということ。これからの農業は公共事業です」

彼の眼差しには、一点の曇りもない。そして、こう続けた。

「農業をやっていないかったら、これだけ多くの人たちと出逢えませんでした。こんなに海外へ行ける機会もなかったはずですよ。まるで人生、旅をしているような感覚です。最終的には、志を同じくする人と一緒に天竺へ行きたいですね」

彼は、やはり変人だった。

(文中敬称略)